

学童保育指導員を対象としたサポートブックの作成・有用性の検討 —指導員の発達障害児対応における困り感の低減を目指して—

○岡田真由子 (すみだ福祉保健センターみつばち園) 金丸隆太 # (茨城大学大学院)

キーワード：学童保育，発達障害，困り感

問題と目的

学童保育とは，保護者が就労等によって昼間家庭にいない小学生を対象とし，放課後，土曜日や春・夏・冬休み等の長期休業中の子どもの生活を保障する施設である。学童保育では，家庭に代わる役割が求められるため，学童保育指導員（以下：指導員）にも高い能力が求められる。しかし，労働条件の低さ，職務の不安定さから離職が早く，入れ替わりが激しく，指導員同士の連携，チームワークの形成が難しい。また，指導員の研修，経験加算が不十分で，専門性の向上が求められている。岡田(2017)で，発達障害児，診断の付いていないグレーゾーンの児童の対応に苦慮していること，研修で学んだことが，現場との相違により，現場で生かせていないことが明らかになった。

本研究では，発達障害児・グレーゾーンの児童対応における，指導員の困り感の低減を目指した仕組みづくりとして，サポートブックを作成し，その有用性を検討することを目的とした。

方 法

全国の教員・特別支援員向けの資料を参考に，ドラフト版を作成し，現場の指導員にヒアリングし，その結果を踏まえ，完成版を作成した。完成版は，“OKブック”と名付け，1.はじめに 2.このサポートブックの使い方 3.発達障害とは 4.リソース集 5.支援シート 6.引用文献・参考文献の 6 項目にした。A4 サイズのリングファイル入れて，取り出しができるようにした。支援シートは，書き込み型にし，知識部分は短く，該当場面ですぐに確認できるように工夫した。OKブックは X 市，Y 市，Z 市の 12 施設に 1 冊ずつ配布し 1 ヶ月間使用させ，60 名の指導員に事後アンケートと，インタビューを実施した。アンケートとインタビューで得られたデータから，OKブックの有用性を検討した。

結果と考察

OKブックの使用により，指導員の困り感は低減し，指導員に変化が見られた。また，OKブックのプラス面とマイナス面が明らかになった。

Table 1 OKブックのプラス面

個人の変化	1. 発達障害や発達障害児について，意識し，考えるきっかけになった。
	2. 「記録すること」により，児童の変化を時間経過を追って確認することができた。
	3. 職場内で実施できる研修の機能ももたらしていた。
指導員集団の変化	1. 協働意識が生まれ，話し合う時間，会話が量が増えていた。
	2. 伝えたい情報の取りこぼしが減った。
	3. 記録を通して他の指導員の対応方法を見ることが，施設内での対応の指針が持てた。

Table 2 OKブックのマイナス面

1. 時間的余裕がなく，詳細な記入は難しい。
2. 既に職場で使用していた日誌類との重複もあり，わずらわしさもあった。
3. 児童の個人情報を書き残すことに対する抵抗感，グレーゾーンだと決めつけてしまうことに対する抵抗感もあった。
4. 毎日書かなければならない，価値観まで統一する，児童をずっと見てなければならぬといった捉え方をしている指導員もいた。

OKブックは，適性（向き・不向き）があった。それは，施設の環境的要因，指導員の個人的要因，集団的要因，リーダーの OKブックへの積極性が影響すると考えられる。OKブックを改訂するとすれば，以下のような案が挙げられる。1. 発達障害児への対応だけでなく，保護者対応や他児への説明に関する対応場面や対応方法について，多くの事例を提示する。2. 支援シートは，1 枚のシートにする。指導員の中には，場面ごとのシートにすること，アセスメントシートがいいといった指導員もいた。書くことへの抵抗感をなくすためにも，エピソードを書き込む方法も考えられる。

OKブックを使用してもらうための工夫としては，まず使い方の丁寧な説明が重要である。OKブックの使用で指導員の困り感が減るということを強調して説明し，動機付けを高めることが重要だろう。また，支援シートは毎日書く必要がなく，残しておきたい情報を書くということを必ず伝える必要がある。併せて支援シートに情報を残すことによるメリットを伝えることで，書くことへの抵抗感が減るのではないかと考えられる。

学童保育は，1 人の指導員が何人の児童を見るのか，教員や保育士のような限度がない。また，雇用状況が不安定で，待遇も決して良くはないにも関わらず，多くの知識，技能を求められ，大変さや矛盾も生じている。そのため，経験年数を重ねていても，自分の能力に自信が持てない指導員もいる。それは，研修機会の少なさ，職場内に先輩がいないからとも考えられる。高岡・籠田(2017)は，指導員の専門性の向上のためには，学習，成長が必要だと示唆した。その方法論の 1 つとして，野中らが提唱し，高岡らが加筆した，組織的知識創造モデルがある。本研究では OKブックを使用した際の，指導員の知識創造モデルを提唱した。

本研究は学童保育に関する研究の進歩の上で，その一歩を踏み出したと言える。本研究の結果を基に，改訂版を作成し，HP で公開する予定である。